

# 生徒各自の読みの確立を目指した指導

——小論文の作成を通して（高校二年生の場合）——

堀江 マサ子

## 一 現状と課題設定

教育現場は、新しい学力観で育った生徒たちばかりになったが、本校の授業形態は他教科の場合、ほとんど教師主導型である。二年生ともなると生徒もその型に慣れつつある。ただ、慣れない生徒の中には授業から逸脱していくものも出てきている。興味・関心が意欲に繋がりが学習に主体的に取り組む素地を生徒は持ちながら、授業形態によつてはそうならない現状も考えられるのである。

自ら学ぶ力の育成を、持続して自ら学ぶ力の育成を、目指すことが肝要である。多量の教材を深く自分自身で納得して学んでいく姿勢を身につけさせねばならない。一人ひとり顔かたちが違いうように、読みの形も異なる。多様な読みを多様な読みとして認めていく、許容していくことが、読むおもしろさに繋がるのではないだろうか。おもしろさを味わうことができた生徒は、自立して読むことができる。読むおもしろさを知り、自立して読むようになる生徒もかなりいる。が、書くことに結びつけている生徒は少ないのが現状である。書く生活の少ない生徒は読みの深まりの度合いが浅いようにも思われる。自分の読みの確かめと次元の高い

次の読みへ高めるために、生徒各自の読みを小論文という形でまとめさせることもできると考えた。

高校二年生ともなると、入学当初のような意欲はなくなっている。進学・就職の目標も切実にそんなには考えてはいない。その生徒たちに自ら学ぶ力を付けさせる課題設定をした。

## 二 仮説と授業構想

生徒は、教師が用意した教材分析を逐一与えて授業展開をしていなくても、自分たちで作品を読んでいけるのではないか。一斉に段落を区切って部分的に読解し全体を把握させていく授業方法よりも、自分たちで主体的に課題を決め解決しそれを発表し、他の生徒と比較検討する。そのことによりその読みを教室全体に広め、深め、その結果として自分なりの論文を書く授業方法の方がよいのではないかと仮説を立てた。教師はそれをサポートする、生徒の読みの確立を手助けすることに徹することにした。

授業をする前に次のことを考えてから授業構想を練った。

〈教材の選び方として〉

教材として、「こころ（夏目漱石）」「万葉集・古今集・新古今集」を選んだのは、表現する能力と伝え合う能力の育成に適した教材だと仮定したからである。「こころ」では教科書の読みの段階でこれまでの私の授業では、多くの生徒が伝え合えないもどかしさの中にいた。その伝え合えなさを「こころ」全編を読むことにより、伝え合えなさを越えて伝えようとしている漱石の意図を生徒は知ることができると思った。それを教室全体に伝えていくこともこの授業は意図している。また、「万葉集・古今集・新古今集」の「和歌」は、もともと伝え合うために歌われたものである。その瞬間の詠みを永遠にするために、歌集は編纂されている。それぞれの歌人の詠み、編者の心を読みとり、教室全体の読みとすることができると思つて教材化した。

両教材とも高校二年生で初めて小論文を書く生徒たちには論点を立てやすいと考へて選んだ。

〈言語活動として〉

読むことを話すことに繋げ、聞くことによつて書くことを深め、再度読み深めて書くというふうにするすべての言語活動を有意義に関連させようとした。その間、情報の集め方、調べ方、まとめ方、発表の仕方などの学ぶ力を育てようとした。（なお、図書館学習も取り入れることにした。）

現代文と古文とに分けて、授業構想を紹介する。

\*現代文「こころ（夏目漱石）」への取り組み

長編小説を授業で生徒に主体的に取り組ませることができるといふ仮説に基づいて授業構想を練つた。教師の読みを押しつけない

いで、生徒一人ひとりの読みを教室全体に広げていき、まとめとして小論文を書かせ、発表させる授業展開を取つた。その概略は次のとおりである。

教科書所収の小説「こころ」のリレー読み 〈二時間〉

← 発表原稿作成（夏目漱石の年譜を配布）

← 他者との関わりの中で、自分の「心」からどんなにかはなれていつてしまふ「先生」の姿を通して、人間という存在の不思議さを書こう。へ人間関係のぐしゃぐしゃについてでもよい。〈二時間〉

← 発表 〈二時間〉

← 「こころ」の論文〈三好行雄〉へ江藤淳、「道草」の論文〈堀江マサ子〉を読んで論文とはどういうものかを理解する。〈一時間〉

← 図書室で自分の好きな夏目漱石の作品を選んでその小論文を書く。

〈一時間、後は家庭学習〉

← なお、「こころ（夏目漱石）」は五〇冊図書室に揃えてある。

生徒たちの読みはすべて発表することを前提とした読みとした。最初の「リレー読み」とは、一人一文ずつを教室の右前から読んでいかせるものである。この方法をとると眠る生徒は出てこない。

二度目の読みは「こころ」の中から自分なりの読みを発表することを明確化させ、自分なりに読みとった要点を図式化する読みである。モデルとして次の例を示した。

A他者との関わりの中で、自分の「心」からどんなにかはなれていってしまう「先生（私）」の姿を通して、B人間という存在の不思議さを書こう。

具体例

A教科書P162/L18（下段）→P163/L16（上段）へ私とKとの会話の部分の「論理のすり替え（話の筋道を自分の都合のよい方へもつてくる）」

①やめてくれて、僕が言  
い出したことじゃない……

Kとの「会話をやめる」ということ「やめる」が  
キーワード

②しかし君がやめたければ、  
やめてもいいが、ただ口先  
だけでやめてもしかたがあ  
るまい。君の心でそれをや  
めるだけの覚悟がなければ。

「会話をやめる」ことを  
「ただ口先だけでやめた  
って」「それをやめるだ  
けの覚悟」と「会話」以  
外の話題にすり替えよう  
とし始めている。

「君は君の平生の主  
張をどうするつもりか。」

「お嬢さんとの恋をやめ  
る」ことにすり替えてい  
る。

このように見てみると、②の「ただ口先だけで、…」以降から「話をやめる」ことから「お嬢さんとの恋をやめる」ことに話題がすり替わっていることに気がつくだろう。

B対人関係の中で、自分の都合のいいように論理をすり替えて  
いる。

問 右の例を参考にして、教科書の中から自分なりに一ヶ所見  
つけ出して図式化してみよう。（人間関係のぐしゃぐしゃにつ  
いてでもよい。）

この過程は一〇〇分の連続授業とした。課題解決学習とした。できあがった発表メモは資料としてプリントし、次の時間に配布した。教科書の同じ箇所はまとめて前に出させて発表させた。発表された内容を質疑応答することによって、教材が多角的に、一人の生徒の読みが全体の読みへ深まり、広がっていくよう配慮した。たとえば教科書の同じ部分について、ある生徒は登場人物の心を、またある生徒は登場人物の癖を、またある生徒は文章には書かれていないことなどを読みとり発表し、多角的な読みを教室として作りあげさせた。

この読み深めの後、小論文を書くために図書室での調べ読みを

させた。小論文例として、「「こころ」の論文〈三好行雄〉〈江藤淳〉、「道草」の論文〈堀江マサ子〉（資料2）、本校生徒作文（プリントはしない）を読んで「論文とはどういうものか」を理解させた。

本校生徒の作品を、次に掲げる。（当時受験のために指導していた三年生の小論文である。指導方法は同じである。）

「こころ」 三つの側面

A子

この作品の中で「こころ」は三つの側面を持っている。それは、心が他人という存在によって変わること、人生は必ずしも心とは一致しないということ、他人の心は決して自分には分らないし、自分の心さえ、完全に理解することは不可能だということ、だ。

「肉体なり精神なり凡て我々の能力は外部の刺激で発達もするし破壊されるもする。」これがこの作品の基礎となっていると思う。他人がいて、初めて心が生まれる。例えば、先生もKも、お嬢さんという他人がいて恋という感情が芽生えた。そして先生の不安もKという他人がいたからこそ生じたのだ。

でも芽生える感情は一人ひとり違う。先生がお嬢さんに恋をした時、先生の心はKのことではいっばいになった。Kの方が自分よりお嬢さんに好かれているのではないか、Kが自分の知らないうちにお嬢さんへ気持ちをうちあけてしまうのではないか。親友のはずのKへの疑いの気持ちは次々と溢れ出た。それは彼が心から信頼していた叔父に裏切られたという暗い過去がトラウマとなって彼の心に住みついていったからだ。一方、Kは先生と全く違った

ことで悩んだ。彼は恋をした自分を恥じた。恋をしてしまった自分をどうしたらいいのか分からなかった。真宗寺に生まれ、自分を信念で絶えず律して生きてきたKに恋は全く予想外の出来事だった。

そんな彼らの共通点は自分の思うままに生きられなかったという所にある。彼らは世間や、道理や常識やトラウマに勝てなかった。彼らはいつもそれらとの葛藤にさいなまれ続けて自決という形で初めて平静を得た。そして、お嬢さんも又自分の思うままに生きられなかった人間の一人だと思う。もし、彼女が自分の結婚相手を選んではいたら、先生もKも、彼女も人生は全く違ったものになったであろうからだ。

人の心は他人には分らない。自分の心でさえも完全に理解することはできない。これはすべての人間に普通の事実だ。ゆえに人は悩み、迷い、苦しむのだ。けれどもその一方で心は、喜びや楽しみ、幸せをも私達に与えてくれているのだ。

人間には「こころ」に表現されたような三つの側面がある。人間が人間である限り、決してそれから逃れることは出来ない。逃れるためには自己抹殺しかありえない。「こころ」を作者の視点からとらえると、死を予感した者の自己抹殺であった。漱石は自分の心を見つめ尽くして「こころ」という作品にした。しかし、死ぬという方法は、積極的な解決にはならない。現代を生きる私達は、漱石が見つめた心を探究した上で、絶えず自己を抑え、他人と協調していくことを学んでいる。いや一生、死を迎えるその時まで学び続けるのだ。

(傍線部は江藤淳の捉え方である)

図書室では、一人ひとりと教師が話し合うことによって論点を明確にさせてから書かせた。具体的に話し合った内容を列挙すると、

- 1 夏目漱石のどの作品を選ぶか。
- 2 選んだ作品をどういう視点から分析するか。
- 3 どう書くか。

「どう書くか」の指導では次のことを示した。

### 1 書き出し

生徒作品例のように結論を最初に持つてこさせること。(初めて小論文を書く生徒に何がしたいかを明確にさせるため。)

### 2 論旨の展開

トピックセンテンスの結論の根拠を書物の中からいくつか抜き出させること。その作業は、対象となった本の中に付箋を要点項目別に色違いでつけさせること。後で内容ごとに整理させること。

### 3 まとめ

結論を、論旨の展開の後の納得した表現とさせること。

こうして書かせた生徒作品「小論文」は発表させ、教室全体の読みとさせた。

\* 古文「万葉集・古今集・新古今集」への取り組み

教科書所収の万葉集・古今和歌集・新古今和歌集を精選して(万葉集 二十首、古今和歌集 十一首、新古今和歌集 七首)

一首一首授業で読み深めた。その後、「万葉集・古今集・新古今集」から課題を選んで小論文を書かせた。課題の選び方やこれらの集についての論文例をプリントして配布し、説明しておく。生徒一人ひとりと教師が話し合うことによって論点を明確にさせる時、それに関する論文は生徒ごとにコピーして渡した。それから書かせた。

## 三 実践とその考察

授業構想に基づいて実践した。項目別に実践過程とその考察を、次に掲げる。

発表原稿作成と発表について

教科書の同じ箇所を発表原稿プリント四例を、次に掲げる。

25番 高柳佳子

P158

私が図書館で勉強しているとき、Kが来て、Kは上半身を机の上に折り曲がるようにして、私に顔を近づけた。

(16)

Kの気持ちをほめて聞く

P154 B P154

(17)

お嬢さんに对する気持ちに打ち明けよう

(18)

ただお嬢さんが好きでたまらない気持ち。親友の私にどうしたらいい相談するよう。気持ちを打ち明けた。私の思惑を知らず。

(19)

自分の気持ち

自分もお嬢さんのことが好きのため、(18)の自分と同じぐらいの強い思いを聞いたとき、先を越されたなと思ってしまう。

(14)

Kの告白を聞いたので、談判でもなしにしようになった。

(15)

図書館では静かにしなくてはいけない。と思いついても普通の行動をとった。

K 図書は静かにしなくてはならない。と思いついても普通の行動をとった。

私が図書館で勉強しているとき、Kが来て、Kは上半身を机の上に折り曲がるようにして、私に顔を近づけた。

Kが本気だと感じ、私はKをおそれる。私の手でKとの関係の念がきざし始めたのです。

KはKの告白におどろく。共にKが本気だということ深く感じる。

私は自分のお嬢さんを打ち明けよう。親友の私にどうしたらいい相談するよう。気持ちを打ち明けた。私の思惑を知らず。

自分もお嬢さんのことが好きのため、(18)の自分と同じぐらいの強い思いを聞いたとき、先を越されたなと思ってしまう。

Kの告白を聞いたので、談判でもなしにしようになった。

図書館では静かにしなくてはいけない。と思いついても普通の行動をとった。

私が図書館で勉強しているとき、Kが来て、Kは上半身を机の上に折り曲がるようにして、私に顔を近づけた。

\* Kの理解があきらかに、Kの告白により、Kと年4の立場が逆転してしまっている。(Kから見て、私の方が立場が上だったのに、下になってしまった。)

2年5巻目 10巻 高柳佳子洋

P158

(14)はその上半身を机の上に折り曲がるようにして、彼の顔を私に近づけた。

P159 D

(17)の重々しい口から、彼が「お嬢さん」に对する切ない愛を打ち明けられたい。

2505 高柳佳子

P154 (T) ~

先を越されたなと思いましたが、相手は自分より強いのだという、関係の念がきざし始めたのです。

重々しい口から、とても容易なことでは動かせないという、感心と私に与えたのです。

彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに对する切ない愛を打ち明けられた。

私は自分のお嬢さんを打ち明けよう。親友の私にどうしたらいい相談するよう。気持ちを打ち明けた。私の思惑を知らず。

KはKの告白におどろく。共にKが本気だということ深く感じる。

Kは自分のお嬢さんを打ち明けよう。親友の私にどうしたらいい相談するよう。気持ちを打ち明けた。私の思惑を知らず。

A、B、C、D四例の中、AのみがKの癖として「口をもぐもぐさせる」を捉えてそれを中心に発表していた。他の生徒は「Kは聞いてほしいだけなのに、先生にとつてはKとの勝負になつていった」「Kを敵視」に重点をおいて発表していた。教材が多角的に四人の視点から捉えられている。このAの発表がG子（Aとは別の生徒）の小論文に「Kの口をもぐもぐさせる癖」として書かれていた。一人の生徒の読みが全体の読みに繋がっている例である。この発表原稿は教室で全体の読みとなつていった。個人個人を見ると最後の小論文との相関関係はない。

選んだ作品をどういう視点から分析するか

【現代文】私の「道草」論の視点（資料2参照）

1 金と愛という視点からの分析

2 語句（片付くなんてものはない）からの分析

3 方法意識 など

を参考にして自分なりの視点をいくつか決めさせた。その視点に即して分析させた。

【古文】資料4参照

「書き出し」について

分析の結果持った自分の意見を、箇条書きにさせた。そして、自分のいいたいことを最初に書くよう指示した。この指導により、トピックセンテンスに結論を現代文、古文ともほとんどの生徒は持ってきていた。たとえば、現代文の場合は、次のようである。

B 子	C 子	D 子	E 子	G 子
<p>夏目漱石の作品から分かった事は三つある。一つめは人間がエゴイズムを内に秘めていること、二つめは真面目さが人間を苦しめていること、三つめは人間が生きていく上で多くの矛盾をかかえているということ。この三つである。</p>	<p>「こころ」の中には様々な夏目漱石という人間の姿が映されているのではないかと私は考える。中でも「先生」の姿の内には特に夏目漱石という一人の男の苦しみというものが描かれているのではないか。</p>	<p>人の心の中には、複雑ながらも互いに関係を持ちながら二つの「自分」が存在している。その一つは身近にいていつも自分が自分と話している心である。それは普通というか、いつも自分自身と葛藤しながら、または強く成長してきている自然な一部分である。</p>	<p>「人間の罪」というものは、その程度が大きかれ小さかれ、あらゆる場面で生まれてくるものである。そして生きている限り、誰かが抱くものである。それは「自分」の他に、「相手」がいて、そこに人間関係ができあがるからだ。そしてそこには、いつも「自分」と「相手」の勝ち負けが見え隠れしているように思う。つまり、「人間の罪」というのは生きていく上でつきものなのだ。</p>	<p>夏目漱石はいろいろな可能性を読者に与えてくれる人だと、私は思う。他の小説家の作品は、答えが一つ決まっていることが多い。しかし、夏目漱石の作品、たとえば「こころ」などは、結末を迎えるまでの話の過程でいろいろな可能性があり、その分話の内容が変化し、その分話のおもしろさが増すのである。その可能性とはほとんどが人間性の可能性である。</p>

M 子	L 子	K 子	J 子	I 子	H 子
<p>私が「道草」を読んで感じたことは、作品のモチーフとなつている「片付かない」という言葉が多く使用されていることである。「片付かない」原因を作品の中からいくつかあげることができる。</p>	<p>私たちが生涯を送っていく中で、「個人主義」というものは果たして必要なのだろうか。世の中、人間にはそれぞれに「個人主義」というものがある。漱石は、それを押さえつけてはならないと考えている。そして、自己に自信と安心を持つべきだという。</p>	<p>「門」は、世間から身をひそめ、世間からみれば孤独でどことなく寂しい生活をしている二人を主としている。それがこの作品全体の基盤であるが、このような生活を送るには理由となる背景がやはり、いくつかある。ここではそれを中心に頭におきながら順にみていこうと思う。</p>	<p>この作品は、客観的な文体にもかかわらず、読み終わったときに、にじみでてやまない愛という抽象的な感情と、夢独特の不気味な透明な空気がみごとに表現されていて、漱石とはほど遠いと思つていたロマンチックな作品に私は驚いた。</p>	<p>「不条理」「矛盾」。こういった言葉に我々は決して良い感情を抱かないだろう。しかし、現実には、このようなことはなくならない。それは我々が一人一人「我」を持つた「人間」であるからだ。</p>	<p>相手の立場に立つて考える。夏目漱石、彼はそのことができる人であった。</p>

古文の場合はすべて冒頭に結論を持つてきている。(資料5参照)  
**論旨の展開**

書き出しで論点が初めにきている作文は、現代文、古文両方とも根拠がかなりしつかりと押さえられており、論旨の展開もきちんとしていた。ただこの過程で多くの生徒は推敲し、かなり書き直しをしていた。中にはメモを作つて並べ替えたり、資料2(発表メモ)のような作品読みとりメモを作っている生徒もいた。資料3のF子の作文はその方法をとっていないが、論展開で「ころ」と「友情」を比較し、「友情」の精神に賛成して書いた感想文となつている。

**まとめ**

最初に書いた結論が詳述の過程を経て、より説得力のあるものとなつていた。

#### 四 実践を通して分かったこと

生徒は、教師が用意した教材分析を逐一与えて授業展開をしてくるにしても、自分たちで作品を読んでいけるのではないか。一斉に段落を区切って部分的に読解し全体を把握させていく授業方法よりも、自分たちで主体的に課題を決め解決しそれを発表し、他の生徒と比較検討する。そのことによりその読みを教室全体に広め、深め、その結果として自分なりの論文を書く授業方法の方がよいのではなかとこの仮説は、ほぼ検証できたと思われる。主体的に学習に取り組ませると、自分が主役であり、自分でしなけれ



は何もできないのでやらざるを得ない。というよりも、そういう意識が、生徒を主体的にさせる。たとえば教科書「ところ」の発表メモ作成の時など、生徒たちは一斉に静かに自分の読みに入っていた。この集中力の中にいる生徒たちは、二時間続きの授業の休憩時間も自分の読みの作業に夢中になっていた。

まとめの段階の小論文は、論点を決めるまでが大変だったようである。私に相談に三分の二くらい生徒がきたのだが、この過程に時間がかかった。現代文の方はまだよいのだが、古文ともなると、二倍以上の時間がかかった。現代文は作品に中心をおいて、論点を明確にして作品分析をし、生徒は自分なりの小論文を書くことができた。古文の場合は参考文献を読ませると、それに引きずられて、自分の論と参考文献とが入り交じってくる生徒もいた。また未習の和歌の内容把握に戸惑っている生徒もいた。生徒各自の読みの確立ができたかどうかの疑問が残った。教材を媒介として生徒が表現活動することにより、それぞれの個性と教材が合体して、読みの形が確立してきたことは確かである。具体的に資料の生徒作品の中から各自の読みを表にして、次に掲げる。

	生徒	各自の読み(生徒作品の中から)		
	A子	「ところ」の三つの側面		
石	B子	エゴイズム・真面目さ・倫理、矛盾		
	C子	「先生」と「わたし」は漱石の二面		
漱	D子	心に存在する二つの自分「自分自身」「他人との関りの中での自分」		

和歌集										夏目								
J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	M子	L子	K子	J子	I子	H子	G子	F子	E子
式子内親王	万葉集における梅について	山上憶良の文学開花	古今集のおもしろさ「歌」と「詞書」	旅人と憶良	歌の排列の仕方	体言止め	作者について	柿本人麻呂の「恋」(「恋ふ」は公のもの「思ふ」が自身の恋愛)	「雲」について万葉集から古今集への意識の変わり方(その時代の人々の意識)	「片付かない」人生	個人主義の必要	孤独でどことなく寂しい宗助夫婦の謎	愛の力、確かさを信じたかった孤独な漱石	人間の価値観の違い	相手の立場に立って考える	人間の可能性	「ところ」と「友情」の比較	「人間の罪」その底にある自分への利益

右の例から、同じ題、同じ内容の作品はない。クラス四〇人四〇様の読みとりをしている。生徒各自の読みの確立は一応達成され

